

概 要

【目的】

保湿剤だけでは口腔乾燥改善が難しかった患者に対し、より有効な口腔ケアの方法を追究したいと考えた。先行研究から昆布のうま味刺激による唾液分泌増加（早川ら、2008）と口腔保湿剤による保湿効果（田村ら、2009）はそれぞれ明らかになっているが、どちらが口腔乾燥に対し有用であるかの比較研究はなかった。本研究では、外用的に潤いを補う保湿剤と昆布水のうま味刺激の効果を口腔水分量の比較によって明らかにする。

【方法】

平成30年5月～11月に回復期リハビリテーション病棟・医療療養病棟に入院中のヨードアレルギーがなく、3食経口摂取をしていない患者14名に対し介入した。一人の患者に対し、口腔ケアで昆布水・口腔湿潤ジェルを連続した28日間ずつ計56日間使用。株式会社ライフ口腔水分計ムーカス®を使用し、安静時の口腔水分量を週2回測定した。

倫理的配慮：患者・家族に口頭・文書で説明し同意を得た。倫理委員会で承認を得た。

【結果】

対象者14名では、昆布水使用時と口腔湿潤ジェル使用時の口腔水分量平均間の差を関連2群のt検定で比較したところ有意差を認めず、介入前の口腔水分量と昆布水・口腔湿潤ジェルそれぞれの口腔水分量平均間で比較を行っても有意差を認めなかった。介入前の口腔水分量が正常値(30以上)の者3名を除いた、11名で同様の比較を実施したところ、介入前の口腔水分量と昆布水・保湿ジェルそれぞれの口腔水分量平均間では、昆布水でP値0.025と昆布水使用時のみ有意差を認めた。

【考察】

田村らの研究では、唾液分泌量が保湿剤使用後20分の時間経過で安静時の値に戻っていた。昆布水や口腔湿潤ジェルを使用した口腔ケアを行っても、時間が経過した安静時には唾液分泌量が介入前に近い状態となると考えられる。

しかし、介入前と近い値に戻ったのは介入前正常値の対象者のみで、口腔乾燥がある対象では口腔湿潤ジェルと比較し昆布水に効果があった。昆布水を使用した口腔ケアでは、うま味成分によって対象者の低下した唾液分泌能が向上したと考えた。昆布水を使用した口腔ケアは唾液分泌を促す効果があり継続することで最終的に正常値に近づく可能性が示唆された。

【参考文献】

早川有紀、他：うま味刺激による唾液分泌促進効果測定, 日本味と匂学会誌 Vol. 15 No. 3 PP. 367-370 2008年12月

田村裕、他口腔粘膜水分量と唾液分泌量の比較及び保湿剤が唾液分泌量に及ぼす効果, Niigata Dent. J. 39(2) :35-42, 2009